



Title	仏教文献学における諸問題 : Gregory Schopenの批判をめぐって
Author(s)	加藤, 均
Citation	日本語・日本文化. 1997, 23, p. 97-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11167
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

<研究ノート>

仏教文献学における諸問題

— Gregory Schopen の批判をめぐって—

加藤 均

1. はじめに

仏教研究における文献学的方法論は、欧米で、そして日本で、唯一学的に認められた客観的な実証主義的研究法であり、現在に至るまでテキストの批判的校訂、それを基にした解読研究、用語索引といったおびただしい研究成果を生み出してきた。この方法論は、19世紀初頭のヨーロッパにその始まりを見る。西洋列強のアジア進出に伴い、パーリヤサンسكريット仏教文献がヨーロッパに流入し、それに聖書神学で培われてきた文献学的方法論を適用することで、仏教文献学、つまり近代仏教学が成立したのである。

仏教文献学というものは、明治期、東本願寺からの留学僧であった南条文雄、笠原研寿（Max Müller に師事）や西本願寺の高楠順次郎などによってヨーロッパから日本にもたらされる。明治という時代は、単に技術・制度の近代化を促しただけではなく、既成宗教教団にもドグマ的な宗学からの脱皮を模索させた時代でもあった。そして、これを契機として、松本文三郎、荻原雲来、姉崎正治などの戦前の仏教学者は続々とヨーロッパに留学することになったのである。[Kiyota (1983), 長崎 (1993)]

このようにして日本にもたらされ、根づいた方法論であるが、ここ20年程の間にアメリカではこの仏教文献学そのものに再考を迫る動きが出てきた。その一つは、言うまでもなく解釈学的方法論の台頭であるが、これについては拙稿 [加藤 (1992)] ですでに論究したので次節で簡単にふれるにとどめ、ここではテキスト至上主義に対して疑義を投げかけた Gregory Schopen の所論を中心に取り上げてみたい。

2. 解釈学的方法論

アメリカにおける仏教研究の新たな動向を特徴づけるもの、それはドイツの哲学者 Hans-Georg Gadamer の解釈学の影響を受けた解釈学的方法論である。仏教文献学がテキスト相互の関係性や歴史的事実との結びつきを解明し、一連のテキスト群に対する首尾一貫した伝承を確定することに主眼においてきたため、テキストがもつ意味の多様性が看過されているのではないかと反省され、さらには、客観的な実証主義への懐疑が、この方法論を唯一絶対とする考え方に挑戦してきたのである。研究者は客観的方法論をもちいると言っても、解釈を行う以上なんらかの主観が入り込まざるを得ない。そこで、解釈者（研究者）とテキストとの関係に焦点を当て、現在の文化的・言語的状况が生み出す解釈者の先入見（我々が立っている地平）が、歴史的に距離のあるテキストとの対話を通して自覚され、修正され、そしてテキストの地平と融合していくプロセス（影響史 *Effective history*）を問題とし、テキストに新たな、そして現代的な意味を語らしめようとする方法論が出てきたのである。ここでは、テキストは決して唯一の意味を有するものではなく、時代的に限定を受けた解釈により多様な意味を持ち得ることになると言えよう。

この方法論を具体的にインド中観思想研究に適用した C.W.Huntigton の所論では次のように述べられている。

もし、我々がこれらのテキストに単に文献学的素材としてではなく、救済のメッセージを告知する聖なるテキストとして関心を寄せるなら、そのとき、そういったメッセージを理解し得る唯一の方法で、—我々の文化的・言語的遺産の一部である先入見や前提を組み込み、照らしだし、そしてそれらに挑戦する声で—我々に向かってそれらのテキストに語らしめなければならない。理解を前提とした意味の予見に道をあけるために合理的な基準や文献学的な厳密さのどちらも、犠牲にする必要はない。ここに挑戦がある。中観派のあらゆる見解の拒絶は論理的な、あるいは認識論的な問題といった時代錯誤的文脈においてではなく、我々の今日の哲学的会話に重要な動向の原動力そのものへの意義ある貢献として理解され得るかどう

かを明らかにすることが必要である。なぜならば、この拒絶は哲学的意味が求められ、見いだされなければならない場だからである。あらゆる見解の否定は我々にとって如何なる意味をもつのであろうか。[Huntington (1989) p.134-135]

中観派は、2・3世紀の学僧ナーガルジュナを開祖とする、自らの思想体系をもたない学派であり、その根本課題は能所・主客の二分化による対象の実体化(自性 *svabhāva*)を生み出す言語活動とも言うべき戯論 (*prapañca*)を徹底的に分析し、否定することにあつた。その、中観テキストが提示する否定・拒絶を現代の西洋哲学者の関心(それが Huntington がたつ地平である)に照らし、解釈することが氏の方法論的な基本姿勢なのである。

3. テキスト至上主義への懐疑

さて、こういった解釈学的方法論は Huntington も「合理的な基準や文献学的な厳密さのどちらも、犠牲にする必要はない」と語っているように、文献学的方法論のすべてを否定しているわけではない。文献学は通常、テキスト批判とテキスト解釈の2分野に分けられるが、解釈学的方法論は総じて後者の批判としてあらわれるのである。一方、Gregory Schopen は、その所論 [Schopen (1991)] で文献学そのものの存立基盤であるテキスト至上主義というものに疑義を投げかけるのである。

Schopen は、ヨーロッパ人が最初にインド仏教を体系的に研究し始めたとき、すでに彼らに入手可能な二つの資料源があつたとする。一つは考古学的あるいは碑文学的資料であり、そういった資料は時代的、場所的にかなりよく位置づけられ、また、かなりの部分「無編集 *unedited*」であり、「読まれる *read*」ことを決して意図しないものであつた。ただし、少なくとも仏教徒一在俗信者と僧侶の両者が実際、実践し、信仰したものの一部を記録し、あるいは反映していると考えられるものであると言う。

もう一つは、実際上年代を確定することができず、ごく最近の写本伝承のなかにしか残っていない、かなりの編集を経た資料であり、それは「正典的」あ

るいは「聖典的」で、少なくとも一つの理想を教え込むように意図されていたものであった。つまり、仏教教団の例外的な一部の人々がその教団で信仰され、あるいは実践されるように望んだ内容を記録しているものなのである。

この二種の資料源が、だいたい同時期に西洋の学者に入手可能になったそのとき、西洋の学者が何故、テキストを選択したのかが問題だというのである。なされた選択は、明らかに歴史的な証拠としての二種の資料源の評価に依拠していたのではなく、プロテスタントの前提に基づいていたのではないかとするのが Schopen の主張である。

まず、批判の前提として J.W. de Jong の叙述を次のように引用する。

E. Burnouf（1852年に死亡し、「仏教研究の卓越した創設者」と呼ばれている）を論ずる中で、J.W. de Jong（彼自身仏教研究における最近の歴史家である）は「Burnoufは、インド仏教はネパールからのサンスクリットテキストとセイロンからのパーリテキストを基礎に研究されなければならないという事実を強調した。Burnoufは仏教史にとってのテキスト研究の基本的な重要性によく気づいていたのである。彼が『序章』で展開した、ブッダの時代のインドに関する考え方、ブッダの教説、その後代の発展、仏教とカーストの関係等はすべて、テキストの詳細な研究に基礎づけられていた」と述べる。

de Jong 自身、かれが Burnouf に帰する 19 世紀前半における立場は、20 世紀後半における彼自身の立場とほとんど同じであることを明確に示す多くの叙述を行なっている。例えば、次のように述べている。「これらの乗り物（仏教の主要な 3 つの分派）のそれぞれが豊富な文献を生み出してきた。疑いなく、こういった文献は仏教を知る上での最も重要な源である。

仏教美術、碑文、硬貨は我々に有用な情報を提供してきた。しかし、一般にそれらはテキストによって与えられた裏書なしに十分理解することはできない。したがって、仏教研究は何よりもまずテキストに集中される必要がある。」[Schopen (1991) p.4]

Schopenはこの引用に関して、(1) de Jongが「歴史の補充物」としての考古学という、あまりにありふれた、過度に単純化した見方を提示していること、また、(2) 考古学がテキスト資料の補充物でなければならないだけでなく、考古学とそれが提示する証拠は「テキストが与える裏書」ともなっていて初めて「十分に理解する」ことができるということ、つまり、考古学はテキスト資料を支え、敷衍するものであるばかりか、それらの資料によって支えられ敷衍されなければならない、さもなければ、考古学はまったく役に立たないものであり、それは自立した証拠となりえず、それゆえ、異なった物語を語り得ない、という点を論難する。そして、その批判を次のようにまとめる。

- 1) テキスト資料に第一の優先順位を与えるこの立場は、「仏教」という知識に到達するために研究しなければならないテキストが修行する仏教徒（僧侶と在俗信者双方）の大多数に知られてさえいなかった可能性を考慮にもいれていない。
- 2) 絡み合ったテキスト資料の大多数が「聖典に基づくもの scriptural」、すなわち、規範的な教義の公式の文字表現であるという事実から、いかなる論述もなされない。
- 3) 最も簡素な公式の物語体のテキストでさえ、一定の目的をもっており、「聖典に基づく」テキストにおいては、特にインドにおいては、そういった目的はほとんど「歴史的」（その術語を我々が用いる意味で）ではなく、実際、この立場が歴史的事実の反映と見なそうとするものは、注意深く考案された理想的パラダイム以上のものでも以下のものでもない。

以上の3点への配慮をまったく行わず、インド仏教研究者はかなり後の写本に保持され、それらの写本によって論じられている、規範的なサンガの規律や教団の理想についての公式の文字化された記述を、あたかもそれらは初期のインドにおける実際の修行僧の宗教的生活や生涯の正確な反映であると見なしてきた。しかし、Schopenは例えば、仏教遺跡にのこる寄進碑文やコイン等の碑銘の研究から、寄進者としての、あるいは貨幣鑄造権をもった富裕な比丘や比丘

尼の存在を明らかにし、テキストが語る「無所有」という規範、即ち僧侶が個人的な財産を所有しないという規範が、実際には崩れていたことを論証するのである。

またさらに、Schopen は現代の仏教学者、考古学者、そして宗教史家によってしばしばとられている方法論的立場は実際、「真実の宗教 true religion」という場を定義し、打ち立てようと試みた、数多くの初期プロテスタント「改革者」によってとられた立場と酷似していると指摘する。彼らは偶像を放棄し、言葉のみにその信仰をおいた人たちであり、具体的に、氏はいくつかの神学者の言葉を引いて論究する。

C.M.N. Eire によれば、小論文「古き神と新しき神について "On the old and the New God"」の姓名不祥の作者は、「キリスト教徒は外にあるものに宗教を求めるのではなく、むしろ文献に求めるべきである」と提起している。また、Eire によれば、「Karstadt は『(神の) 言葉の卓越』を再主張し得ると期待して、彼の時代に支配的であった宗教的形式尊重主義とは反対の方向に進み始めた」と言われる。彼の立場は「この言明の中にはっきりと表わされている。つまり、神霊のみが生命を与え、そして神霊は物的な対象ではなく、言葉を通して働くのである。『神の言葉は靈的であり、そのみが信仰者に有益である』と。」

Zwingli は彼の著書『真実の神と偽りの神についての註釈 *Commentary on True and False Religion*』のなかで、「我々は敬神とともに働かなければならないそれらのもごとを、外から神の言葉、内から精霊によって、教えられるべきで、芸術家の手により作り上げられた彫像によってではない」と述べている。Calvin も物的なもの、即ち「彫像やそういったもの」を「宗教の不可欠で必須の部分」ではなく、「宗教を歪める夥しい罵倒者」で宗教から排除されなければならないものと見なした。それらは、「(神の) 言葉によって靈的に定めた」ものではなかったのである。

[Schopen (1991) p.19-20]

もちろん、こういった16世紀のプロテスタントの宗教改革者の議論と現代の仏教学者、考古学者、宗教史家の前提との間の際だった類似性を述べるだけでは、もちろんなものも立証されないが、それは、ある可能性を示唆すると言う。つまり、「真実の宗教」が位置する場に関する16世紀のプロテスタントの思考が、あまりに徹底的に西洋の知的な伝統に吸収されてしまい、その論争的、神学的起源は忘れられ、今では、まったく所与のものとして受け取られるようになったと考え得る可能性である。もし、そうであるなら、インド仏教研究史を決定してきたのはまさしくこの思考であり、インド仏教について西洋人が描いた心像は、インド仏教の歴史や価値というものより、それら自身の宗教的な歴史や価値のほうを多く写しだしているのかも知れず、宗教改革は、結局のところ終ってはいないのではないかと結論づけるのである。

4. おわりに

Schopenの論考は文献学的方法論の根底から揺るがす、かなり衝撃的なものである。宗教改革の余波が仏教文献学の成立に関与していたのかどうかはすぐに判断できる問題ではなからうが、Schopenが主張するように、仏教文献学が考古学的な研究成果を看過しただけでなく、歪曲して解釈してきたことも事実である。勿論、膨大なテキスト資料に比してあまりにも考古学的資料は僅少であり、それが正当に扱われたとしても、それ自体が一つの物語を語りうる、即ちテキストに代わりうる資料になるとは思えない。しかし、文献学におけるテキストの権威を否定するには、テキスト資料が物語る世界に考古学的資料による反証を示すだけで十分ではなからうか。

このように、仏教文献学の限界が明らかになってきた今、それに代わりうるのは唯一、テキストに多様な意味を見いだす解釈学的方法論であり、その確立が急がれるべきであろう。しかし、日本では、新たな方法論の模索する試みは残念ながら始まってはいない。ヨーロッパから文献学的方法論を移入したように、今度はアメリカから摂取するのであるだろうか。

参考文献

- Kiyota, Minoru (1983) 「近代仏教学の動向－日本と西洋の比較」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』創刊号
- Huntington, C.W. (1989) *The Emptiness of Emptiness: An Introduction to Early Indian Madhyamika*. University of Hawaii Press.
- Schopen, Gregory (1991) "Archaeology and Protestant Presuppositions in the Study of Indian Buddhism", *History of Religions*.
- 加藤 均 (1992) 「現代哲学と中観思想の接点－C.W. ハンティントンの方法論をめぐって－」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第10号
- 長崎法潤 (1993) 「海外における仏教研究者の視点－方法論を中心として－」『海外における仏教研究の方法と課題』（大谷大学真宗総合研究所）

<キーワード> 仏教文献学, 文献学的方法論, 解釈学的方法論

The Problematic of Philological Methodology in Buddhist Studies

— Concerning Gregory Schopen's Critique —

Hitoshi KATO

The philological methodology of Buddhist studies has been academically approved in the West and Japan. In the Meiji era, this method was transmitted from Europe to Japan by Japanese Shin Buddhist priests who studied in western countries.

Recently, however, the philological approach has been criticized by American scholars, especially Gregory Schopen. In his paper, "Archaeology and Protestant Presuppositions in the Study of Indian Buddhism", he claimed that textual studies have ignored archaeological and epigraphical evidences which record or reflect a part of the religious life of Buddhist monks in early India and this textualization of Buddhism might be attributed to a sixteenth-century Protestant polemical conception of "true religion".